

Urban Catalyst

アーバン・カタリスト

実践▼▼都市再編集の現場から

藍谷鋼一郎 — 著

彰国社





Urban Catalyst

アーバン・カタリスト

実践▼都市再編集の現場から

藍谷鋼一郎 著

彰国社



はじめに——6

序章……………**都市を編集する**

では、何故、アーバン・カタリストなのか？——12
成長社会から縮小社会へのパラダイムシフト——17
スクラップ・アンド・ビルドの盲点——19
都市を編集するための
アーバン・カタリストと4つの戦術——22
4つの戦術——25 保存手術(Conservative Surgery)——26
最小限の介入(Minimal Intervention)——29
都市の鍼治療(Urban Acupuncture)——31
都市への埋込み(Urban Infill)——33
戦術を実践に移す——35

第1章……………**オリンピック・レガシー(ロンドン)**

はじめに——地主貴族によるまちづくり——38
エンタープライズ・ゾーンを契機に
ロンドン東部地区への開発が始まる——41
ロンドン最貧地区への投機⇨ブラウン・フィールドから
スポーツ・パークへ——42
▼▼▼キーパーソンに聞く ボブ・アライズ——44
メディアを駆使したコンパクト・オリンピック——67
オリンピックによる都市「オリンピックポリス」——68
カタリスト的視点——70

第2章……………**アイデア・ストア(大ロンドン市タワースハムレッツ区)**

はじめに——移民が過半数を占めるタワースハムレッツ区——72
▼▼▼キーパーソンに聞く セルジオ・ドグリアーニ——76
住民のニーズを集約——図書館とラーニングセンター融合——78
ショッピングとラーニングによる戦略的配置——82
教育による都市再生——87
デイビッド・アジャイによる2つのアイデア・ストア——89
まちに現れた波及効果——97 カタリスト的視点——100

第3章……………**ハイレイン(ニューヨーク)**

はじめに——グリッド都市ニューヨーク——102
高架貨物線跡を空中庭園へ——産業遺産の発掘——106
フレンズ・オブ・ハイレイン——109 1枚の写真——115
パリ「プロムナード・プランテ」に学ぶ——118
アート・ギャラリーが立ち並ぶ
ウエスト・チェルシー地区——120
最新ファッションの発信地 ミートパッキング地区——121
ハイレインとザ・スタンダード・ホテル——123
▼▼▼キーパーソンに聞く マシュー・ジョンソン——126
▼▼▼キーパーソンに聞く トッド・シュリーマン——142
用途規制の変更「ゾーニング」——150
まちに現れた波及効果——155
カタリスト的視点——160 まちめ——162

第4章……………**十和田市現代美術館(青森県十和田市)**

はじめに——官庁街通り(駒街道)を中心とする都市形成——164
街の衰退——167 アートによるまちおこし——167
明快なコンセプト 美術館をまちに開放する——171
▼▼▼キーパーソンに聞く 藤浩志——174
まちに現れた波及効果——観光客の増加——187
世界水準の建築の出現——隈研吾による市民交流プラザと
安藤忠雄による教育プラザ——188 残された課題——190

第5章……………**新町川(徳島)**

はじめに——徳島の成り立ち——194
中心市街地の衰退——196
▼▼▼キーパーソンに聞く 中村英雄——200
新町川の再生がまちに人を呼び戻す——
新町川水際公園としんまちボードウォーク——208
新町川を舞台にまちづくりコミュニティが形成される
イベントによるまちなか回帰——213
まちに現れた波及効果——216 カタリスト的視点——216

あとがき——220
参考文献——227
クレジット——229

エディトリアルデザイン⇨新保韻香⇨平岡佐知子

はじめに

都市の文脈(コンテクスト)を継承し、部分的な改変を繰り返すことで都市を発展させる方法を編集型アーバンデザインという。この編集型アーバンデザインは、取材や調査で集めた情報や映像を整理し、わかりやすい文章として編集する記事やドキュメンタリー、あるいは、一つの物語として編集するドラマや映画を制作するプロセスに似ている。歴史とともに都市にある既存の要素を分析し理解することで、都市の成立過程、特徴や短所・長所を掴み取り、個々の要素の順序や組合せを変えることで、都市のポテンシャル、つまり、特徴や強みを引き出し、都市固有の魅力を高めていくことをテーマとする。

その具体的方法の一つが、アーバン・カタリスト(Urban Catalyst)である。アーバン・カタリストとは、「都市の触媒」という意味で、化学において化学反応を促進させる触媒のようなもので、アーバン・カタリストを投入することで、周囲にポジティブな連鎖反応や波及効果を引き起こす。すなわち、都市再生の契機となり、再生効果を促進させる起爆剤となる要素のことである。アーバン・カタリストには物的要素から非物的要素まで様々なものがある。物的要素には、建築物を中心に、公園などのオープンスペース、道路や橋などのインフラ設備、仮設の構造物やアートなどのインスタレーションなどがある。そして、非物的要素には、都市の再編にも大きな影響を及ぼすオリンピック

クなどの国際的イベント、地域や地区など地元に着した祭りやフェスティバルなどのイベント、人間によるアクティビティなどが当てはまる。この手法は、近年、欧米都市では盛んに取り上げられているが、日本においては、まだまだ馴染みの薄い手法である。しかも、日本ではアーバン・カタリストが、都市再生手法として明確に定義づけられていないため、実際にはアーバン・カタリストの事例と分類されていなくても、結果として欧米で言うところのアーバン・カタリスト的な効果を及ぼし都市に活力を与えた都市再生事例は数多くみられる。



戦後急速に生活水準の向上を目指してきた日本社会においては、自動車社会の到来による道路網や高速道路網の整備、持ち家志向による居住地の郊外化、その反動から中心市街地の空洞化、そして職住分離の概念も浸透することで、市街地の拡大による都市圏の巨大化が加速していった。右肩上がりの経済成長は、建築物や都市インフラのライフサイクルが短いことに肯定的で、いわゆるフロー型、悪く言えば、自転車操業のような不安定な状態で、20年から50年という短いサイクルで、都市の更新を繰り返してきた。確かに、日本の神社は式年遷宮というシステムによって、周期を定めて社殿を更新し、新しい社殿に御神体を移すことを繰り返してきた。20年というサイクルで社殿が、まったく同じ建物として更新されることで、次世代に建築技術を伝承すると同時に、建物は、常に新しい状態を維持することができる。しかし、日本の都市における建築物の短命化とは、意味合いが違う。経済が破綻、あるいは、縮小し、建築投資やインフラ投資が冷え込むと、たちまち閉塞感に見舞われてしまう。バブル期以降の失われた20年が、それを如実に物語っている。



右―アメリカ都心再生の先駆けとなったフエニエール・マーケットプレイスの再開発事業(ポストン)
左―解体工事が進行する九州大学・箱崎キャンパス

本書の構成について――

本書では、序でアーバン・カタリストの理論を整理し、編集型アーバンデザインの特徴をわかりやすく解説する。続く1章から5章までは、具体的なアーバン・カタリストによる再生事例を紹介する。内訳は英米都市から3事例、国内からは、多くの地方都市が課題とする中心市街地の衰退や空洞化に対する取組みとして2事例を挙げている。各事例においては、何度となく実際に現地を訪れ、季節や時間帯での賑わいの変化、平日や祝日での場所の使われ方の違いなどを踏査するとともに、実際にプロジェクトにおいて重要な役割を担ったキーパーソンへのインタビューを繰り返している。本書では、6人のキーパーソンとの対談を掲載しているが、実際には30人を超える関係者との対話から得た都市再編集における「現場」からの「生」の声をもとに本文の構成を行っている。巻末にある関係者一覧を参照いただきたい。

まず、1章では、近年、開催費用が巨額化することで、世界的な大都市しか招致できなくなると危惧される夏季オリンピックに関して、既存のスポーツ施設を多用することでコンパクトなオリンピックを実現したロンドン・オリンピック、パラリンピック2012について紹介する。ロンドンではオリンピックを契機として、貧しい東部地区にあるストラトフォード駅周辺を一気に再生させた。ここでは、オリンピック開催から18年後の2030年を念頭にいったオリンピック・レガシーと地区の将来計画を綿密に練り上げている。2020年にオリンピックを開催する東京のオリンピック・レガシー計画を推進するうえで、参考となる戦略が多分に盛り込まれている。

次に、2章では、同じくロンドン東部地区にあるタワームレットツ区において図書館と成人教育センターを合体させた新しいタイプの図書館「アイデア・ストア」が地区再



右下―オリンピック招致への
入札案（鳥瞰図）

生に寄与した役割について紹介する。ロンドン有数の低所得者や移民が多い地区で、行政がとったアプローチは、教育による都市再生だった。その核になるのがアイデア・ストアの開設で、住民の教育レベルを上げること、スキルアップによる就業機会の向上や所得の上昇を狙い、結果として治安改善に貢献している。住民の利用率が低かった既存の図書館の課題や改善点を調査・分析することで、アイデア・ストアの立地条件、デザイン、運営方針などを決定するなど、アクセスや利用時間、親しみやすいデザインなどの改善策に取り組んでいる。



右下―アイデアストア・ホワイトチャペル
左上―ハイライン

3章は、ニューヨーク・マンハッタンにおいて、治安悪化の温床と蔑まれ解体の危機に瀕した20世紀初頭の産業遺産である高架鉄道「ハイライン」が「空中庭園」として生まれ変わることで、わずか20年余りの間に、衰退の一途を辿る裏ぶれた工業地区が、ニューヨークでもっともファッショナブルでホットな場所へと変貌を遂げた事例を紹介する。今や、世界中のデザイナーやディベロッパー、行政官などが注目するハイラ



インによるカタリスト効果だが、その影響力は、「ハイラインもどき」を世界中に増殖させつつある。しかし、現実には、ハイラインのような再生効果を実現させている訳ではない。舞台となるミッドパッキング地区やウエスト・チェルシー地区には、ハイラインを起爆剤に爆発的に躍進するための都市要素が水面下で整いつつあった。地域に住む2人の青年によるハイラインの保存運動により、多くの人を巻きこみながら、都市が変化していく様子に焦点を当てることで、カタリストが機能する条件、成功するための秘訣を解き明かしていく。

続いて、4章は、青森県十和田市の官庁街において、行政



機関の統廃合により増え続ける空地対策として、現代美術館を投入することで都市再生を推進する事例を紹介する。日本の道・百選にも選ばれるほど魅力的な駒街道として知られる官庁街通りとまちに開かれた美術館をうまく融合することで、現代アートとはまったく無縁の十和田市が現代アートの発信地として認識される契機となった。アートを通じたまちおこし活動が徐々に浸透することで、今後の発展が期待できる都市である。

最後の5章は、私の故郷、徳島から市内にある新町川の再生がまちに与えた影響について紹介する。近代化の代償として汚染された河川を「自分たちの手で、美しくする」というスローガンのもと一人の市民による清掃活動が始まった。徐々に有志が集まり、やがて川が蘇る。このことを契機に川への愛着が復活し、新町橋と両国橋に挟まれた中心部の護岸に新町川水際公園、しんまちボードウォークが整備される。新しく形成された2つの都市公園は、徳島市の新しい顔となり、公園を舞台としたさまざまなコミュニティ活動が展開され、中心市街地へと市民の足が戻り始める。今のところ、祝祭日を中心としたイベント時に限定的な人々の流れを、どのようにに日常的に取り戻すが、今後の課題となっている。



上 アート広場と十和田市現代美術館
左下 徳島LEDアートフェスティバル。
チームラボによる
「呼応する球体のゆらめく川」が
新町川を舞台に展開する。

序章……………



スクラップ・アンド・ビルド

保存手術

最小限の介入

都市の鍼治療

都市への埋込み

都市を編集する

序 都市を編集する

都市を編集する

では、何故、
アーバン・カタリストなのか？

振り返ってみると、都市を編集することで、荒廃した地区に再び脚光があたり、賑わいを取り戻すとともに、都市を再生する手法に注目が集まったのは、1970年代の終わりから80年代にかけて盛んに繰り広げられたアメリカの都市再生事業、そして、ウォーターフロント開発だろう。その先駆け、中心にいたのが、近代建築の巨匠ウォルター・グロピウス(Walter A. Gropius)の弟子で、ハーバード大学でも教鞭をとったアメリカの建築家ベンジャミン・トンプソン(Benjamin Thompson)であろう。アメリカの都市にあるほとんどのダウンタウンは、その当時、荒廃の一途を辿っていた。それは自動車社会の到来による富裕層の郊外移転、職住分離によりオフィス街と住宅

都市は、生きている。だとすると、そこにはある種の理想形があるに違いない。都市には人々に限らず、建物、文化、そして、自然など様々な要素が複雑に絡み合い、積層している。時代の流れの中で、栄枯盛衰を繰り返す。新しい都市が生まれることも、既存の都市が廃墟となることもある。人々が暮らして快適で住みやすい都市とは。欧米では、都市を再生させる手法としてのアーバン・カタリストが、30年以上も前に萌芽している。そして、今、「名前」には馴染みが薄くても、ようやく日本でも発芽しようとしている。

街など機能分化が進んだことにより、治安の悪化が著しく進行したからだ。結果として、一般的な就業時間となる平日の朝から夕方までは、ビジネスパーソンで賑わうオフィス街が、夜間や週末は、一転して閑散とした危険な地区に様変わりするというのが、アメリカ大都市におけるダウンタウンのイメージとして定着していた。この悪循環により、白人を中心とした所得の高い者は郊外に住み、移民や浮浪者などの低所得者がダウンタウンに住むという負のスパイラルが、支配的となっていた。

「人々の集まる生き生きとした場所、交流の場を再生する」というコンセプトで、歴史的な建物を保存・改修し、食品関係のマーケットとして再生させたのが、ボストンの中心にあるフェニエルホール・マーケットプレイスという再開発事業で、18世紀に建てられた公設市場を中心に、両側にある19世紀の店舗、オフィス、倉庫か

年代以降、急速に加速する。

そしてベンジャミン・トンプソンの名声を決定的にしたものに、ボルティモアにあるハーバープレイスがある。インナーハーバーの一面に計画されたマーケットは、賑わい創出の拠点となった。このインナーハーバーは、コンテナ輸送が主流となることで、退廃した古い港湾地区をマーケットや水族館、スポーツ施設、高級ホテル、レストランなどの集積する一大エンターテインメント地区として再生させることで知られる。北米のウォーターフロ



①



②

- ①—アメリカ都心再生の先駆けとなった再開発事業
- ②—毎日がフェスティバルのようなフェニエルホール・マーケットプレイス



③



④



⑤

ント開発の先駆けるプロジェクトで、80年代以降の都市再生に強い影響を与えている。港のもつ異国情緒あふれる雰囲気演出、イベント広場で繰り広げられるパフォーマンスやショーなどが受け、ダウンタウンに人々を引き戻す「勝利の方程式」として、水辺の広場やプロムナードとマーケットの組合せは、世界的に広がっていった。

ベンジャミン・トンブソンの名前は、日本ではそれほど知られていないが、この手法は、日本のウォーターフ

- ③ 北米ウォーターフロント開発の先駆けるプロジェクト
- ④ ハーバープレイスの夜景
- ⑤ ボルティモア・インナーハーバー
- ⑥ 自動車社会による
- ⑦ 急勾配の斜面に発達したサンフランシスコの街並み

ロント開発にも影響を及ぼしている。横浜や福岡のベイエリア開発にも取り組んでいた総合プロデューサーの浜野安宏は、ベンジャミン・トンブソンの友人で、日本におけるバブル絶頂期にはマイケル・グレイブス(Michael Graves)やジョン・ジャーディー(Jon Jerde)などアメリカの建築家を多くの日本のデベロッパーに引き合わせている。余談になるが、東急ハンズのアイデアをはじめ、南青山にあるファッションビル From 1st や表参道から分岐する渋谷キャットストリートなどの開発で知られる浜

野総合研究所時代のパートナーだった北山孝雄は、安藤忠雄の双子の弟で、ベイサイドプレイス博多埠頭を設計したのは、三男の北山幸二郎である。ベイサイドプレイス博多埠頭の空間構成は、驚くほどボルティモアにあるハーバープレイスに類似している。余談ついでに、大阪南港の天保山にある巨大な水族館「海遊館」を設計したケンブリッジ・セブン・アソシエイツは、ベンジャミン・トンブソンの朋友で、ボルティモアにもボルティモア水族館(現「国立水族館」)を設計している。

社会構造や産業構造の変化により、荒廃した地区をマーケットという商業施設を投入することで、都市を再生させるアーバン・リニューアル(Urban Renewal)も、当時は、まだカタリストとしては、認識されていなかったが、その後の周囲に与えた影響や再生効果を鑑みると、まさにアーバン・カタリストの先行事例と言える。しかも、港という産業施設に独占されていた水辺空間を、人々の憩いの場として再編するという都市の読み替えは、衝撃的だったに違いない。

私が1997年、バージニア工科大学の修士課程を修了して、ポストンに移り住んだのは、建築を媒介に都市に変化をもたらすというトンブソンの手法を学ぶためだった。ポストンでの2年間(1997-99年)は、実務を通して、東海岸にあるメガロポリスを北から南へ、南から北へと駆け巡るうちに、あつという間に過ぎて行った。



⑥



⑦

新天地は、西海岸のサンフランシスコへと移行する。大西洋に沿って連綿と巨大都市が連なる東海岸は、アメリカ誕生の歴史が都市の至る所に刻み込まれている。世界を牽引してきた強いアメリカの経済力と技術力の粋を集めた建築・都市空間が形成されていると言っても過言ではない。東海岸を後にすることに、まったく未練がなかった訳ではないが、同じアメリカでもまったく雰囲気の違い、西海岸への興味は日増しに強くなり、いつしか転職を考え始めるようになった。

しかし、転職はあっけなく訪れる。1999年晩秋に経歴を1枚にまとめたFAXが、文字通りサンフランシスコへの片道切符へと変身したからだ。今のようにインターネットやEメールがそれほど発達していなかった当時、FAXというのは、まだまだ主要な伝達手段だった。初冬のポストンを後にし、サンフランシスコ空港に降り立った第一印象は「カリフォルニアは暖かい」だった。氷点下20度くらいまで冷え込むマサチューセッツの冬は、降雪も深く、かなり厳しい。英国の影響が強く現れるポストンの街並みは、赤レンガや石造を基調とし、重厚で趣深い。一方、パステル色でビクトリアン調の建物が、急傾斜の坂道沿いに張り付くサンフランシスコの街並みは、陽気な西海岸を体現しているようで、対照的だった。イギリス系、アイルランド系のいわゆるアングロサクソンが多いポストンと比べ、ヒスパニック系やアジア系

3 ハイライン（ニューヨーク）

キーパーソンに聞く▼▼▼

藍谷 鋼二郎×マシュー・ジョンソン〈デイラー・スコフィディオ+レンフロ・副所長〉

藍谷——ハイラインが出来て、

ミートパッキング地区や

ウエスト・チェルシー地区は、大きく変化しました。

地価は上がり、賃料も上昇するなど

ジェントリフィケーションを問題視する声も

上がっています。しかし、ハイラインほど

周辺地区に影響を与えた事例は、世界中探しても、

なかなかありません。設計者として、

そのあたりをどう感じているかをお聞きたい。

マシュー・ジョンソン（MJ）——ハイラインは、長い間、

人々の記憶から消えていました。ビルとビルの谷間に

建設された高架鉄道は、完成当時、多くの人を魅

了しました。ユートピアとも言えばよいでしょう

か。1930年代のことです。列車が空中を走る光景

は、新しい世界が開かれた象徴として、当時の新聞や



46

雑誌を賑わし輝かしい未来都市への好奇心を大きく揺さぶったのです。

しかし、60年代には、ほとんど使われなくなりました。実際に稼働したのは20年ちょっとです。産業の衰退、いや、移転によって地区の性格も変わっていきました。鉄道よりもトラックでの輸送が主流になったのも影響しています。

藍谷——80年代に最後の貨物列車がハイラインを冷凍された七面鳥を運んだと聞いていますが。



47

46——ハイラインの実施コンペで最優秀賞をとった案
47——ハイラインの存在を世間に知らしめた
ステイプン・ホールによる「ブリッジの家」

MJ——確かに、その頃まで、鉄道は走ってましたが、60年以降は本数も少なくなり往時の勢いや活気は、すっかり失っていました。列車が走らなくなると同時に、ハイラインの存在も忘れられていったのです。

そんな中、ニューヨーク在住の建築家ステイプ



マシュー・ジョンソン・Matthew Johnson

〈デイラー・スコフィディオ+レンフロ・副所長〉

1999年、マシュー・ジョンソンはスタジオに入所し、

2014年、副所長に昇進。

ミシガン大学アン・パー校で建築を学び、

プリンストン大学で建築学修士を取得、

建築実務20年のキャリアを持つ。

2004年に実施されたハイラインの設計競技会以来、

ハイラインのプロジェクトアーキテクトとして

10年以上設計チームを牽引し、現在もハイラインの

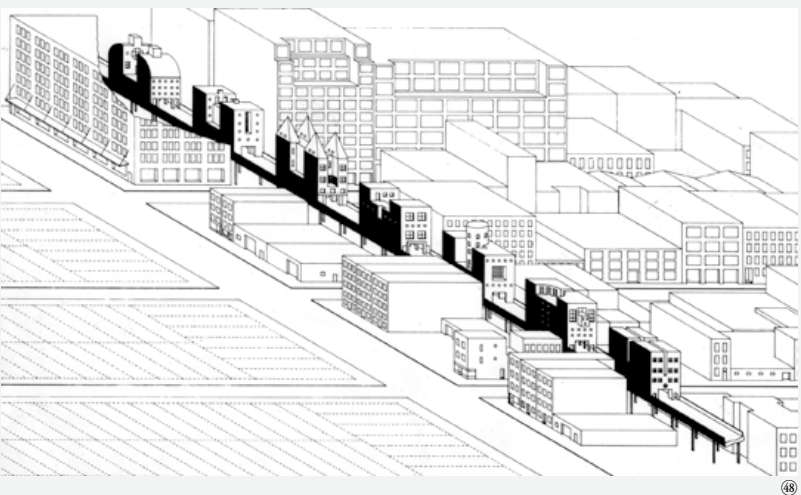
拡張工事に関するデザインを継続している。

写真はリカルド・スコフィディオ（中央）

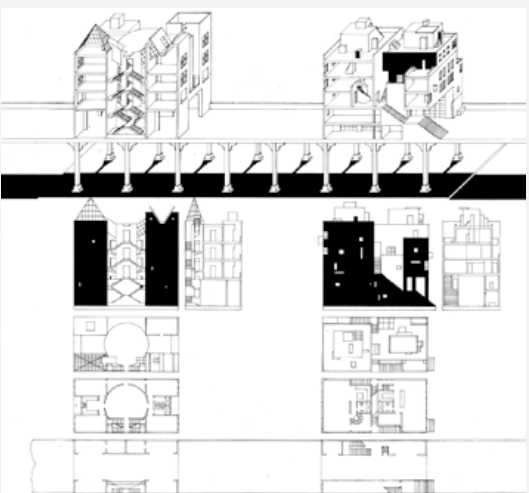
エリザベス・デイラー（左）そして、

マシュー・ジョンソン（右）

- ④8 ―ハイラインを再生する「ブリッジの家」
 ④9 ―「ブリッジの家」のバース
 ⑤0 ―ハイライン上に計画された「ブリッジの家」



④8



⑤0



④9

ン・ホール (Steven Hall) が1982年に発表した「ブリッジの家」は衝撃的でした。廃線となったハイラインの上に、住宅群や公共のオープンスペースを計画する案を提案したからです。ポストモダンの住宅が空中に連続する光景は、アーティスト、建築家、都市計画家など多くの人々の想像力を掻き立てました。それが引き金になって、ハイラインの存在にも注目が集まり始めました。

藍谷 ― スティーブンは、ハイラインを始めたのは自分だという自負があるようです。何度かスティーブンの事務所を

訪問したことがあります、

彼のアトリエからはハイラインや

ハドソン・ヤードの再開発が間近に見えます。

しかも11階から見下ろす感じで。

MJ ― 見えない産業遺産が再発見された瞬間ですね。高架鉄道にしても、高速道路にしても、一般的には、道路の真上などに設置されるので、全体像がはっきりしています。構造体がとにかく目立ちます。しかし、ビルとビルの谷間に建設されたハイラインは、ほとんど存在を消しています。特にチエルシーは、ビルボードなどの広告看板が多く建てられていたので、その陰に隠れていたことも、人々の目に付きにくかった一因です。

アイデア・コンペの実施

藍谷 ― フレンズ・オブ・ハイラインのジョシユア・デビットとロバート・ハモンドの二人も、ハイラインの存在は、何となく知っていたけど、断片断片を見た記憶がある程度で、それが1.5マイルもある連続した1本の高架鉄道だとは、夢にも思っていなかったと言っていました。

MJ ― フレンズ・オブ・ハイラインが主催したアイデア・コンペは、大きな反響がありました。2003年頃、当時はハイラインの公園化も決まっていなかった中で、実現性や実用性は不問で、ハイラインの活用法に関する議論を活発化することを主目的に開催されています。

軌道上にジェットコースターを建設する案、ハイラインから水が流れる滝つぼのような案、オーソドックスに空中公園とする案など、36か国から720作品が集まりました。応募作品すべてをグランド・セントラル駅に展示することで、人々の関心が一気に高まりました。この展覧会を契機に、ニューヨーク市から1575万ドルの予算が計上されています。

最優秀賞には、ハイラインを1.5マイルのラップ・プールにするという奇抜な案が選ばれています。



⑤1

- ⑤1 ―ハドソン・ヤード、ウエスト・チエルシー地区、ミートパッキング地区をつなぐ
 ハイライン（航空写真）

藍谷 ― ハイラインを1本のプールにするという案は、面白いですね。

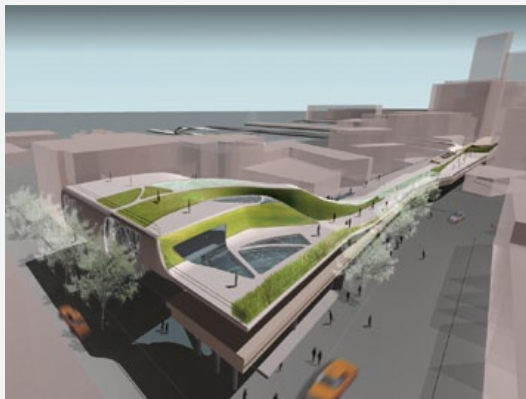
MJ ― アイデア・コンペに引き続き、2004年にはフレンズ・オブ・ハイラインがニューヨーク市と共催で、ハイラインの実施コンペを開催しました。建築家、ランドスケープ・アーキテクト、エンジニア、植栽家、照明デザイナーなどさまざまな専門家からなる設計チームが募集され、書類審査の結果、52チームから4チームが選出されました。審査員はNY市から5人、フレンズ・オブ・ハイラインから4人、ほか10数人から構成され最終決定権は、フレンズ・オブ・ハイラインに委ねられていました。

藍谷 ― 上位4組には、ザッハ・ハディドやスティーブン・ホールも名を連ねていましたね。

そこで最優秀賞を勝ち取ったのが、あなたたちジェームズ・コーナー・フィールド・オペレイションズとデyllar・スコフィディオのチームですね。

コンペの勝算はどのあたりにありましたか。

MJ ― そうですね、当社もフィールド・オペレイションズも、いわゆるアトリエでした。規模も小さく



⑤②ーハイラインを一本の長い滝に見立てたアイデア
⑤③ーハイラインの構造体を生かした案(アイデア・コンペ)
⑤④ー一本のラップ・プールに見立てた案(アイデア・コンペ)
⑤⑤ージェットコースターが出現する案(アイデア・コンペ)
⑤⑥ーハイラインがラップ・プールに変貌する案(アイデア・コンペ)
⑤⑦ー最優秀賞案となった Diller Scofidio+Renfro と James Corner Field Operations によるデザイン案(実施コンペ)
⑤⑧ーステイアブロン・ホール案(実施コンペ)
⑤⑨ーザッハ・ハデイド案(実施コンペ)
⑥⑩ー場所ごとに組合せが変化するソフト・ランドスケープとハードランドスケープの提案案

